

# Weekly Survey

党政政治局員の総入れ替え、改革派のモドロウ氏の首相就任など東ドイツの改革の流れはいままで遅れを一挙に取り戻そうとするかのごとく急テンポで進む。インドでは中産階級が台頭してきて空前の消費ブーム。ほかに日本の若者のアメカジルックなど。

中嶋嶺雄

## ベルリンの壁がなくなる日

歴史がいま大きく動いている。ポーランド、ハンガリーに始まった東欧諸国の変動は、ついに東ドイツにまで及び、しかも独裁的指導者だったホーネッカー前議長退陣後の動きも急である。海外旅行の完全自由化という予想外の措置をクレンツ新指導部は打ち出し、次いで内閣（閣僚評議会）総辞職と改革派のモドロウ政治局員の首相就任、社会主義統一党（共産党）中央政治局の大幅改組と矢継ぎ早の改革に動き出したが、このような動きが今後どこまで進むのか、全世界が注目している。

今週の *TIME* は World 欄でこの東ドイツに焦点を当て、クレンツ政権の当面の課題を詳しく追っている（“No Longer If but When” [pp. 18-20]）。その中でもとくに興味深いのは、ベルリンの壁についてで、ホーネッカー議長はかつて「反ファシストの防壁」（Anti-Fascist Protection Barrier）だと呼んでいたが、いよいよこの壁もなくなるかもしれない時代が訪れつつあるからである。

しかし、この記事は、この壁の文字どおりの破壊はさまざまな点で当分なかりと見ている。それは、1660万の人口のうち150万人もが西ドイツへの移住を望んでいるという状況の中で、東ドイツからの大量の移民が、ただでさえトルコなどからの移民に悩む西ドイツで新たな失業の増加や住宅不足などを引き起こしているからであり（この点については今週の Business 欄の“The Second Miracle” [pp. 36-38] と題した西ドイツ経済についての記事を参照するとよい）、「中国の万里の長城を除けば、世界でもっとも有名なこの壁」はいましばらく残るだろうというのである。

わたしは、去る9月上旬にチェコから東ドイツを訪

れ、東西ベルリンを分割する壁を改めて間近に見てきたばかりである。東ベルリンのフンボルト大学では中国問題のセミナーを行ったが、天安門事件について公式には批判が許されない東ドイツの学者たちは、「もう少し待ってください」とセミナーの後でわたしにささやいた。その「もう少し」がこんなに早く訪れたのであり、ひとたび動き出した歴史の潮流を押しとどめることはもはやできないのではなからうか。

## ヤルタ会談から44年後のマルタ会談

このような東欧情勢を背景に、来る12月2日、3日、ブッシュ米大統領とゴルバチョフ・ソ連共産党書記長との初の首脳会談が地中海洋上のマルタ海域で開かれることになった。まさに *TIME* の記事の表題のとおり“The Saltwater Summit” (pp. 14-17) なのだが、その優柔不断ぶりが批判的となってきたブッシュ大統領、相次ぐ民族反乱など深刻な国内不安に悩むゴルバチョフ書記長それぞれが抱えている「内部事情」に注目せざるを得ない。そうした中で、東欧情勢については、ブッシュ大統領は「ゴルバチョフ書記長と論じ



首都ニューデリー近郊では住宅建設ラッシュ

合うことよりもソ連の真意を聞き出したい」というのが米国の立場である。

一方のソ連は米国から市場経済のメカニズムを学んでこれを導入し、そのことを条件に国際通貨基金(IMF) や関税貿易一般協定(GATT) にも加盟している。こうしたソ連の意図を米国側がどうさばくかが注目されよう。マルタといえば、クリミア半島のヤルタとともに米ソ関係にとっては歴史的に忘れがたい場所である。44年前のスターリンに対するルーズベルトの失敗の轍を踏んで「第二のヤルタ」にならぬようブッシュ大統領は努めるだろう。ヤルタとマルタで韻を踏んでいるのだが、そこを「It Rhymes with Malta」(p. 17) と題して回顧している囲み記事は外交史の勉強のためにも見落とせないページだ。

## インドに台頭する中産階級

ところで、今週のカバー・ストーリーは、著しい勢いで台頭しつつあるインドの中産階級(middle class) についての特集である。エアロビクスをする女性、POLO、Benetton などの流行ファッションの写真などとともに、中産階級に属する何人かのインド人の紹介など変化に富んでいたいへん面白い。

過去5年間に台頭してきた中産階級は、現在総人口の12%から24% (1億~2億人) を占めているといわれ、ニューデリー在住の経済学者 V.A. Pai Panandiker の推測によれば、10年後には総人口10億人中約3億人が中産階級に属することになるといふ。もともと膨大な人口を抱える国だけに、割合は他国に比して低くても、消費財市場としては、インドの中産階級は大きな将来性を有しているといふことができる。

19世紀末以降の世界史は、西洋文明(とくに米国のそれ) が世界中に広がっていく過程と捕らえることもできるが、最近の『悪魔の詩』事件や天安門における「血の日曜日」にも顕著なように、過去の歴史において偉大な文明の形成地域であったイスラム、中国、インドなどは、そうした西洋化(「コココロニゼーション」) に対しこれまで頑強な抵抗を示してきた。そのインドにおいて民主主義の国、米国の大きな特徴である中産階級の台頭が見られるようになったということは、現代史の関心からも注目に値するといつてよいだろう。

もっとも、インドの貧困は、欧米諸国、日本はもとより、アジアの NIES(新興工業経済地域) に比べてもいまだに目に余るものがあり、過去5年間インド経済がかなり順調な成長を遂げているとはいえ、将来的に問



市民の批判に耳を傾ける東独共産党幹部

題が山のように残っていることも忘れてはならない。

貧困克服の地道ではあるが確かな第一歩は教育の充実であろう。インドの中産階級は、自分たちの子どもがよりよい生活を送ることを望み、高い授業料も惜しまず私立の学校へ行かせる者が多いという。ボンベイ郊外に住むインド人ヤッピーの Anju Chhaya は次のように述べている。「子どもにはお金がかかるが、可能な限りよいものを与えたい」と。子どもに何も与えられなかった貧しいインドの時代はいまや去りつつあるのだろうか。

## 日本の若者を魅了する「アメカジ」

今週の Living 欄で “American Casual Seizes Japan” (p. 55) というちょっと面白い記事を見つけた。いま日本ではやりのファッション、「アメカジ」についてその人気の秘密を探っている。実際、渋谷センター街などを歩いてみると「アメカジ」ファッション(渋谷では「渋谷カジ」というそうである)の若者の多さにはびっくりする。この記事でも指摘しているように、皆それなりにおしゃれではあるのだが、まるで制服を着ているように同じに見えてしまう。自由で个性的であるはずの「アメカジ」も日本人の手にかかるひとつの流行に過ぎなくなってしまうのかもしれない。しかし、今日の若者がひと昔前の型にはまったファッションから脱却し、自由な発想のおしゃれを楽しみ始めていることも事実であろう。日本の若者たちが、この自由な発想でおしゃれをファッションだけでなくさまざまな方面に生かして新しい日本を造り上げていくことに期待したい。

(なかじま みねお/東京外国語大学教授)

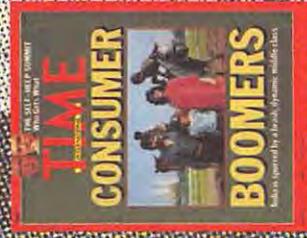
November 13, 1989 タイムマラソン

平成元年11月16日発行・毎木曜日発行・第6巻・第11号・通巻第272号・昭和60年2月19日第3種郵便物認可

# TIME

Weekly

# S C P E



Editorial Director

**The Saltwater Summit**

Culture

**Consumer Boomers**

Ideas

**How the Earth Maintains Life**

TS情報マガジン  
TS Feature